



文化学園リポジトリ

Academic Repository of BUNKA GAKUEN

服飾文化共同研究拠点／文化ファッション研究機構

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture / Bunka Fashion Research Institute

文化学園大学

Bunka Gakuen University

文化服装学院

Bunka Fashion College

文化ファッション大学院大学

Bunka Fashion Graduate University

文化外国語専門学校

Bunka Institute of Language

Title	非漢字系日本語学習者の漢字学習初期段階における字形認識と習得
Author(s)	池田, 心
Citation	文化外国語専門学校紀要 23(2010-02) pp.39-65
Issue Date	2010-02-01
URL	http://hdl.handle.net/10457/970
Rights	

非漢字系日本語学習者の漢字学習 初期段階における字形認識と習得

日本語科 非常勤講師 池田 心

(2009.9.1 受)

要 旨

非漢字系日本語学習者の漢字学習初期段階における漢字の字形に対する認識の在り方を知るために、初級レベルの漢字 504 字の中から、似通っていると学習者が判断する漢字を任意に選ばせ、グルーピングさせる調査を行った。また、漢字の字形認識の習得に与える影響を調べるため、本調査の結果と本調査の約 2 カ月後に行われた初級前半修了試験の文字分野のスコアの相関の有無を調べた。その結果、似通った 2 字を 1 グループとしたグループ (ペア) 数が、似通った 3 字ないしはそれ以上の数の漢字を 1 グループとしたグループ数より多かった。また、テストスコアとの相関は有意であった。したがって、字形の面で似通った漢字を教育で扱う際は、ペアという単位で識別能力を向上させることが習得を促進する可能性があることを提案する。

<キーワード> 非漢字系 初級 漢字教育 字形認識 習得

1. はじめに
2. 調査の背景 (先行研究) と目的
 - 2-1. 背景 (先行研究)
 - 2-2. 目的
3. 調査内容
 - 3-1. 調査実施要領
 - 3-2. 調査協力者の属性
4. 結果
 - 4-1. 学習者が作った字形のグループ合計数
 - 4-2. 学習者が作った 3 種のグループ数とその後実施された文字のテストのスコアとの関連性

5. 考察

5-1. 分類したグループの種類と習得の関係

5-2. 各グループ内に含まれる漢字からみた学習者の分類方法の考察

5-2-1. 1グループ内に2つの漢字が含まれるグループの分類方法

5-2-2. 1グループ内に3つの漢字が含まれるグループの分類方法

5-3. 教育面への応用

6. まとめ

7. 今後の課題

注

参考文献

資料

1. はじめに

非漢字系日本語学習者の漢字授業を担当すると、非漢字系の学習者は、日本語ネイティブ話者とは、異なる反応を示すことがある。教師がある2つの漢字が明らかに字形の異なる漢字であると認識していても、学習者には両者が同じように見えたり、時にまったく同じであると言い切ったりする場面に、幾度となく出くわし、非漢字系学習者の漢字に対する認識の在り方に関心を抱いた。そこで、非漢字系学習者の学習初期段階における認識の仕方に合わせた漢字指導の方法を編み出すべく、漢字の字形分類と習得の関係について得られた見地を本稿に記したい。

2. 調査の背景（先行研究）と目的

2-1. 背景（先行研究）

高木（1994）に、非漢字系日本語学習者が有しているパターン認識能力には、学習者自ら作り出すもののほかに、非漢字系日本語学習者に特有なものがあるという報告がある。したがって、非漢字系日本語学習者の漢字の認識は、日本語ネイティブ話者のそれとは異なっているため、日本人の先入観の入らない、非漢字系日本語学習者の目による、漢字の構成要素^{注1}別難易指標の作成が望まれるとしている。^{注2}

2-2. 目的

本研究では、漢字を構成要素別に考える前に、漢字学習の初期段階にある学習者が漢字の字形を構成要素よりも大きい、字単位でどのように見ているかを調べることを目的とする。さらに、漢字の字形に対する認識が習得にどの程度影響を与えるかを見るかために、初級レベルの漢字を字形の側面から分類する調査を行った後に実施された、当校の初級前期修了試験における文字分野のテストスコアとの比較により、認識と習得の関連性についても考察したいと思う。そして、その考察によって得られた知見を非漢字系日本語学習者に対する漢字教育に取り入れていくことを提唱するものである。

3. 調査内容

非漢字系日本語学習者が初級の初めの段階において持つ、漢字の字形に対する認識の独自の在り方を調べるために、以下の要領で、当校日本語科の初級クラスの学生のうち、非漢字系の漢字クラスを履修する学生を対象に調査を行った。

3-1. 調査実施要領

- ・調査実施期間：2009年5月27日～6月3日
- ・調査対象：当校日本語科2009年度4月期生初級8～11組の非漢字系向け漢字授業を取っている学生16名（国籍は次項参照）
- ・調査方法：初級レベルの漢字一覧表（資料1参照：当校オリジナル漢字テキスト「かんじ・カンジ・漢字1」および「同掲書2」の

目次を基に作成)と記入用紙(資料2参照)を各自に渡し、字形の点で、お互いに似通っていると思われる漢字を2つまたは3つ以上のグループに分けて記入用紙に分類し、期日までに本稿執筆者に直接提出する。

- ・調査実施に先立ち、上記該当学生を5月27日の放課後に教室に集め、調査の狙いや記入用紙の記入方法についてガイダンスを行った。

3-2. 調査協力者の属性

表1 調査協力者の国籍(当校日本語科・初級16名)

学習者	国籍	学習者	国籍
L1	ケニア	L9	フィリピン
L2	コートジボワール	L10	韓国
L3	インドネシア	L11	バングラディシュ
L4	カンボジア	L12	シンガポール
L5	韓国	L13	韓国
L6	フィリピン	L14	フィリピン
L7	韓国	L15	ウガンダ
L8	パプアニューギニア	L16	タイ

4. 結果

4-1. 学習者が作った字形のグループ合計数

表2 学習者および1グループ内に含まれる漢字数別グループ合計数

1グループ内の漢字数	2	3	4	5	6以上
L1	25	11	1	-	-
L2	4	6	6	6	3
L3	18	6	1	1	-
L4	29	5	-	-	-
L5	22	11		1	-
L6	21	17	2	2	-

L7	28	7	2	-	-
L8	51	3	-	1	-
L9	10	2	1	3	1
L10	28	16	1	1	-
L11	2	2	3	2	-
L12	30	7	4	2	1
L13	19	2	1	-	-
L14	22	7	1	-	-
L15	14	4	1	-	-
L16	8	10	2	2	293

表2のように、全体的には、2つの漢字を1つのグループ（ペア）としたグループ（ペア）の数が3つ以上の漢字を1つのグループとしたグループの数に比べて圧倒的に多かった。しかし、学習者L16のように6つ以上の字のグループを多く作った学習者もいた。このことは、調査の依頼をガイダンス形式で行った際、グループ数は任意であることが学習者L16にはうまく伝わらなかった可能性が考えられる。なぜなら、分類した漢字の延べ数が16人の学習者の中で、極端に多いためである。したがって、学習者L16の結果を差し引いて全体の傾向を見ると、グループ内の文字数が増えれば増えるほど、作るグループ数は減る傾向が見られる。

4-2. 学習者が作った3種のグループ数と

その後実施された文字のテストのスコアとの関連性

表3 テストスコアおよび1グループ内に含まれる漢字数別グループ

*表中「2との相関」とは、「1グループ内に含まれる漢字数が2つのグループ」と「テストスコア」の相関を表す。同様に、「3」は「1グループ内に含まれる漢字数が3つのグループ」、「4」は「1グループ内に含まれる漢字数が4つのグループ」を表す。

学習者	L1	L2	L3	L4	L5	L6	L7	L8	L9	L10	L11	L12	L13	L14	L15	L16
テストスコア (50点満点)	36	41.5	41	48	50	50	50	48	48	50	46	45	49	50	28	18
2との相関	0.39*															
3との相関	0.56*															
4との相関	-0.18															

調査の2カ月後（2009年8月11日）に行われた当校の初級前期終了テスト内で実施された「文字」のテストスコアをグループ分けの結果と照らし合わせることで、初期段階に非漢字系学習者が持っている漢字に対する認識の仕方と漢字の習得の関係について調べた。結果、2つの漢字を一つにしたグループの数とテストスコアの相関係数(r)は、表3のように、 $r=0.39(N=16)$ であった。また、3つの漢字を一つにしたグループの数とテストスコアの相関係数は、 $r=0.56$ であった。前者は、ある程度の相関があると考えられ、後者は、かなり高い相関があると考えられる。一方、4つの漢字を一つにしたグループの数とテストスコアの相関係数は $r=-0.18$ となり、ほとんど相関はないと考えられる。このことは、4つ以上の漢字を一つにしたグループを多く作っても、テストスコアとの相関は見られないことを意味する。さらに、上記の値を精緻に分析するため、5%水準で有意として無相関検定を行った。その結果、2つの漢字を一つにしたグループとテストスコアの無相関検定の結果の値、p値は、 $p=0.14$ で $p<0.05$ となり、「2変数間の相関がゼロである」という仮説を棄却できなかった。3つの漢字を一つにしたグループの検定結果は、 $p=0.24$ で $p>0.05$ となり、仮説が棄却された。したがって、3つの漢字のグループ数とテストスコアの相関は、5%水準で有意

であった。よって、高い相関があると言ってよいだろう。具体的には、表4が表すように、3つの字のグループを多く作った学習者ほど漢字のテストスコアが高くなるという関連性である。また、表5が示すように、2つの字のグループを多く作った学習者においても、3つの字のグループを多く作った学習者ほどではないにせよ、漢字のテストスコアが高くなるという傾向が見受けられる。

表4 3つの字のグループ数とテストスコアの相関関係

*表のx軸は学習者を、y軸はテストスコア（50点満点）を表す。

*凡例の「G数」とは、調査で学習者が個々に作成したグループの総数を表す。

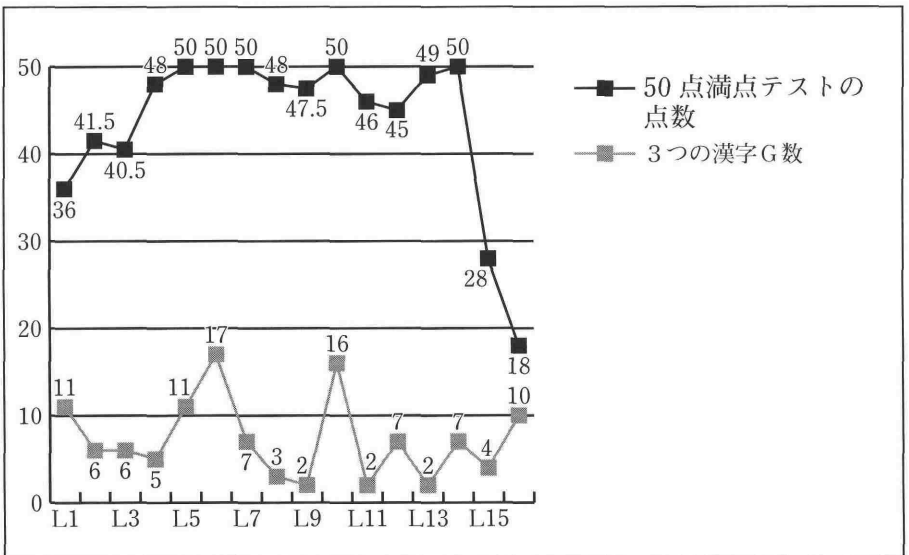
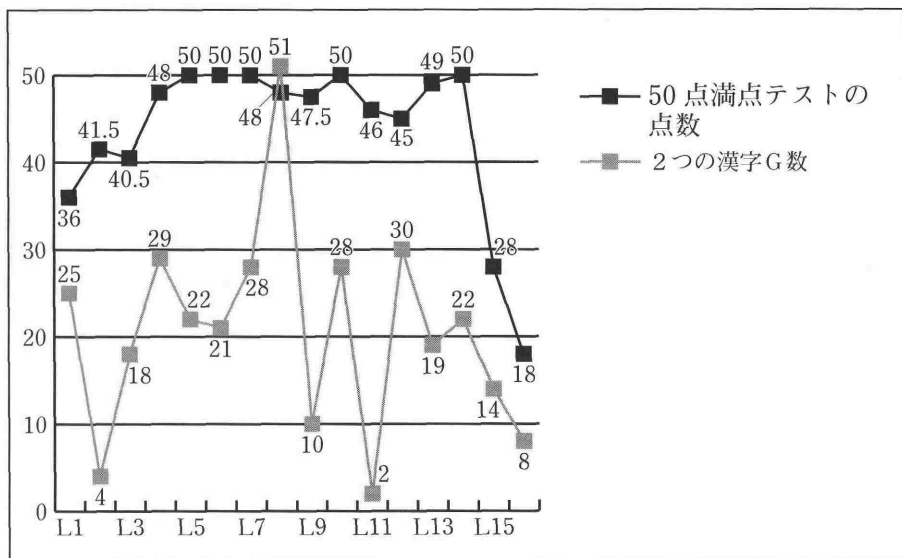


表5 2つの字のグループとテストスコアの相関関係



5. 考察

5-1. 分類したグループの種類と習得の関係

4-2で、3つの漢字のグループを多く作った学習者ほど、漢字の試験の得点が高いという傾向が見られた。また、2つの漢字のグループを多く作ったLは、3つの漢字のグループを多く作ったLに比べて、グループ数とテストスコアの相関はやや低いものの、テストスコアが高い傾向にあることが分かった。上述の2点から、2つの漢字を識別するだけでは、不十分であり、3つの漢字をそれぞれ識別できることが習得にとっては必要であるという示唆が得られる。

5-2. 各グループ内に含まれる漢字からみた学習者の分類方法の考察

5-2-1. 1グループ内に2つの漢字が含まれるグループの分類観点

4-1で、1つのグループ内に含まれる漢字が2つのグループの数が学習者全体として最も多い旨を述べた。本項では、それらのグループに含まれる漢字を学

習者がどのような方法で分類したのかということについて分析する。(資料3参照) まず、部首の有無によると思われる分類^{注3}は、184件中32件であった。また、部首の違いによると思われる分類^{注4}は、184件中36件であった。一方、部首以外の部分の違いによると思われる分類は、184件111件であった。111件のうち、グループにした2つの漢字の字形が微妙に異なるもの(資料3凡例「外A」参照)は35件、2つの漢字の字形が極端に異なるもの(資料3凡例「外B」に該当するもの)は、76件あった。このことから、漢字学習の初期段階の学習者は、部首による分類よりも部首以外の部分による分類を多く行っていることが推察される。しかし、同時に、部首による分類を行っていることも事実であり、両者の違いを意識することなく、分類していると思われる。このことは、部首という概念や働きについての知識を持っていなくても、部首に対する形の上での認識は、ある程度されていることを示している。

5-2-2.1 グループ内に3つの漢字が含まれるグループの分類方法

1つのグループ内に漢字が3つあるグループに含まれる漢字を学習者はどのような方法で分類したのであろうか。部首によると思われる分類と部首以外によると思われる分類とでは、それぞれ98件^{注5}中、18件、28件となった。(資料4参照) 部首以外によると思われる分類の内訳は、グループにした3つの漢字の字形が互いにそれぞれ微妙に異なるものが、28件中7件、3つの漢字の字形が極端にそれぞれ異なるものが、28件中21件あった。ここでの留意点は、前項5-2-1における2つの字のグループと異なり、3つの字のグループの分類は分類の方法が複数見込まれ、分析が複雑化することである。現に、部首による分類と部首以外による分類、そのどちらにもよるとと思われる分類結果が、98件中43件に上った。以上を踏まえ、分類の方法が複数存在することが考えられるため、個人差が生まれると想定される。

5-3. 教育面への応用

5-1で述べたように、3つの漢字を識別できるようになることは、漢字習得のある通過点において必要な要素であるということが暗示されたが、前項5-2-2から、3つの字のそれぞれが互いに形が似通っていると認識し、それらを一つのグループに括れるということは、2つの字の字形の違いを認識し、一つのグ

ループ、つまりペアを作る場合に行う処理と異なり、より複雑な処理をしていると考えられる。そのため、字形の似通った漢字3字をA・B・Cに置き換えて考えた場合、A・B・Cの3つをひとまとまりにして学習するよりも、AとB、BとC、AとCといった対を作り、学習する方法が学習者の負担を減らす意味においても、学習効果の面においても望ましいと思われる。このような概念は、音声教育においては、ミニマル・ペア練習に見られるように用いられ、発音指導に取り入れられている。文字教育にもこのような概念を取り入れてもよいのではなかろうか。その際に、留意したいことは、日本語ネイティブ話者が字形について持っている認識のみによらず、非漢字系日本語学習者が字形について持っている認識で共通する部分を指導項目に取り入れるということである。今回行った調査は、非漢字特有の字形認識と非漢字の中にある個人差というもの的一端を教示しているように思われる。さらに、非漢字系学習者が、どのような方法で字形を分類したのかという視点で調査を行うことの必要性も判明した。

6. まとめ

非漢字系日本語学習者が漢字学習初期段階において、漢字の字形を分類する際には、部首だけでなく部首以外の構成要素にも着目し、類型化しているようであることが分かった。この点は、高木（1994）が言う、非漢字系日本語学習者の字形に対する認識と日本語ネイティブの認識は、質的に異なることを支持する調査結果になったと言える。2つの字形を似通っていると判断する学習者や3つの字形を似通っていると判断する学習者のテストスコアが、4つ以上の字形を似通っていると判断する学習者よりも高かったことから、2つないしは3つの字形間の識別能力を向上させることが漢字の習得にとって必要であることが示唆された。さらに、教育への応用としては、3つの字形間の識別ができるようになる前の段階として、2つの字形間の識別を促進することが指導の対象になり得るということも分かった。

7. 今後の課題

今回の調査は、漢字学習の初期段階における非漢字系日本語学習者の字形に対する認識の在り様を知り、そこで得られた視点を教育へ応用するのが目的であった。しかし、言語習得というものは、日々刻々と変化する人間の営みである。そのような性質を持つ現象は、継続的な観察を抜きにしては説明できないだろう。そこで、今後も継時的に、同様の調査を行う必要がある。また、学習者を対象に彼らの持つ漢字の字形分類における観点を調べ、それらのうち比較的全体に共通する部分を抽出し、漢字指導に取り入れていく中で、漢字の字形認識が習得に与える影響を見ていく必要があるだろう。

注

- (1) 構成要素とは、部首に限らず、1つの漢字を形成する部分（パーツ）全般を指す。
- (2) 高木裕子（1994）「漢字の構成素を中心にした非漢字系日本語学習者の漢字パターン認識能力における質的分析」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集第4号』p.85
- (3) 「部首の有無によると思われる分類」とは、2つの漢字のうち、一方には、部首を含むが、もう一方には、その部首が含まれないものを1つのグループ（ペア）にしたものを指す。例えば、「欠」という字と「次」という字を1つのグループとしてまとめた学習者は、この場合、部首である「讠（にすい）」が「次」の方には含まれるが、「欠」の方には含まれていない。そこで、部首の有無による分類を行ったと思われる。
- (4) 「部首の違いによると思われる分類」とは、一方の漢字に含まれる部首と、もう一方の漢字に含まれる部首が異なるものを1つのグループにしたことを指す。
- (5) 98件中1件は調査用紙の記述から学習者L16が資料①から選択した項目が不明であるため、判別できなかった。よって、判明しているデータを基に考えるならば、分母は97となる。

参考文献

- (1) 迫田久美子（2005）『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
- (2) 高木裕子（1994）「漢字の構成素を中心にした非漢字系日本語学習者の漢字パターン認識能力における質的分析」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集第4号』

資料1-1 初級レベルの漢字一覧(1)

資料①

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	上	下	中	大	小	月	日	本	人	今			
B	火	土	木	口	目	犬	古	広	右	左			
C	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	百	千	万
D	川	山	女	子	田	力	男	先	生	言	見		
E	外	名	友	早	明	休	私	安	学	行			
F	文	交	校	好	水	字	円	話	門	何			
G	前	午	時	間	計	分	半	会	社	員			
H	自	朝	牛	多	少	白	赤	青	高				
I	父	兄	夫	入	立	止	切	作	洗				
J	車	台	天	氣	全	国	音	楽	仕	事			
K	化	花	品	金	北	西	東	南	長	暗			
L	貝	魚	茶	肉	良	食	定	店	失	礼			
M	来	京	住	活	元	買	売	読	耳	聞			
N	市	姉	妹	母	困	固	個	手	足	体	冷	伝	
O	形	色	面	辺	空	雨	林	森	記	者	暑		
P	室	和	洋	去	年	冬	夕	方	相	談	決	公	
Q	出	席	欠	次	歌	同	糸	結	婚	式	家	具	
R	内	容	始	終	練	習	予	約	紙	教	科	書	
S	心	思	悪	忘	忙	性	泳	歩	走	起	死		
T	用	痛	病	院	豆	短	頭	顔	首	指			
U	銀	堂	館	図	部	屋	場	戸	所	新	近		
V	勉	強	昼	夜	毎	寒	涼	若	深	静	危		
W	海	港	池	地	都	道	県	町	区	村	民		
X	各	客	落	使	帰	着	受	消	集	合	飲	酒	
Y	黒	由	黄	横	軽	重	動	物	園	果	馬	駅	
Z	英	語	授	業	研	究	宿	題	原	願	漢		

資料 1-2 初級レベルの漢字一覧 (2)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
a	春	夏	秋	快	適	觀	光	旅	成	神	代	
b	繪	映	画	料	理	写	真	服	味	遊		
c	最	初	後	昨	週	曜	期	番	現	在		
d	正	反	对	不	便	利	遠	遲	速	低	變	
e	貸	借	返	開	閉	押	持	呼	取	置		
f	医	薬	熱	疲	効	治	待	配	付	退		
g	主	両	親	族	弟	君	皆	様	協	声		
h	知	覚	通	勤	乘	降	働	探	向	急	送	
i	経	営	発	表	運	転	連	告	説	散		
j	数	例	窓	階	電	济	財	達	布	専		
k	卒	規	則	証	号	度	関	係	旧	職		
l	直	線	角	質	問	雜	誌	湯	油	材	当	
m	増	減	回	答	迷	調	進	要	引	頼		
n	準	備	建	設	世	界	注	意	給	留		
o	有	無	可	否	産	製	的	券	能			
p	美	細	弱	暖	太	眠	難	簡	单	残	念	
q	試	験	希	望	参	考	実	技	信	復	路	論
r	野	菜	草	育	然	燃	風	晴	守	鳥	島	
s	加	助	泣	折	登	任	選	続	違	感		
t	特	別	議	演	録	資	招	訪	際			
u	平	器	幸	側	箱	飯	枚	末	満			
v	工	商	他	状	接	団	必	放	以			

資料 2-1 記入用紙 (1)

れい

1. A7 2. B5 3. A8 4. B3 5. C10

6. 7. 8. 9. 10.

→

1. 2. 3. 4. 5.

6. 7. 8. 9. 10.

11. 12. 13. 14. 15.

16. 17. 18. 19. 20.

21. 22. 23. 24. 25.

26. 27. 28. 29. 30.

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

資料 2-2 記入用紙 (2)

クラス _____ 名前 _____

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

資料 2-3 記入用紙 (3)

クラス _____ 名前 _____

A series of 20 horizontal dotted lines for writing, arranged in a grid pattern across the page.

資料3-1 学習者の漢字分類の分析結果(1)

資料③

1グループに2つの漢字が含まれる				1グループに2つの漢字が含まれる			
分類内容		グループ 延べ件数	字形の特徴	分類内容		グループ 延べ件数	字形の特徴
上	土	2	外A	貝	具	1	外A
人	入	4	外A	外	名	2	外B
見	貝	2	部F	先	生	1	外B
右	左	2	外B	学	字	2	外A
具	見	1	外B	短	頭	1	外B
目	自	1	外A	姉	妹	2	部B
言	話	1	外B	市	姉	3	■
間	聞	1	外B	困	固	1	部B
全	金	5	外B	終	紙	0	—
者	暑	4	外B	遠	遅	3	部B
固	個	4	■	科	料	3	部A
車	事	4	外B	注	住	0	—
車	東	3	外B	黄	横	3	■
林	森	3	外B	各	客	2	■
試	論	1	外B	伝	公	1	外B
送	運	1	外B	良	食	5	外B
心	思	1	■	池	地	5	部A
文	交	4	外B	持	待	4	部A
交	父	1	■	同	何	0	—
百	白	0	—	夕	多	1	外B
自	白	7	外A	夕	名	1	外B
夫	天	4	外A	川	山	2	外B
思	忘	0	—	万	方	2	外A
然	燃	4	■	今	合	1	外B

資料3-2 学習者の漢字分類の分析結果(2)

無	燃	0	—	頭	顏	1	外B
鳥	島	8	外B	海	港	1	部B
海	母	2	外B	具	県	1	外B
内	肉	7	外A	少	歩	1	外B
員	買	2	外A	動	働	2	■
員	貝	0	—	痛	通	1	部G
買	具	0	—	痛	病	4	部B
貝	買	1	■	注	泣	1	部B
引	弱	0	—	本	体	1	■
欠	次	2	■	住	主	0	—
午	牛	1	外A	題	願	1	外B
午	千	1	外A	犬	太	1	外A
口	回	0	—	古	右	0	—
走	起	2	外B	運	転	1	外B
走	歩	2	外B	間	簡	1	■
枚	放	1	部A	子	好	0	—
林	休	0	—	耳	聞	2	■
来	平	1	外B	忘	忙	1	外B
平	半	0	—	早	草	1	■
田	男	1	外B	飲	飯	1	部B
田	由	2	外A	原	願	1	外B
問	関	2	外B	目	則	0	—
大	太	1	外A	信	言	1	■
材	村	1	部B	今	冷	0	—
楽	薬	2	■	正	証	0	—
話	語	1	部B	新	親	1	部B
作	昨	2	部A	力	協	1	外B
困	団	1	部B	日	目	0	—

資料3-3 学習者の漢字分類の分析結果(3)

録	銀	1	部B	音	暗	1	■
財	則	2	部B	話	計	1	部B
馬	駅	3	外B	売	読	0	—
大	犬	1	外A	グループ合計数		184	

《凡例》

- 偏が一方にはあって、もう一方にはない。
- 冠が一方にはあって、もう一方にはない。
- ▣ 旁が一方にはあって、もう一方にはない。
- 構が一方(一つ)にはあって、もう一方(ほかの二つ)にはない。
- 部A 一方(一つ)の偏ともう一方(ほかの二つ)の偏が異なる。
- 部B 一方(一つ)の旁ともう一方(ほかの二つ)の旁が異なる。
- 部F 一方(一つ)の足ともう一方(ほかの二つ)の足が異なる。
- 部G 一方の部首が垂でもう一方の部首がにようである。
- 外A 部首以外の部分の形が微妙に異なる。一つないし二つの線や棒や点の有無による違いなど。
- 外B 部首以外の部分の形が極めて異なる。

資料4-1 学習者の漢字分類の分析結果(1)

資料④

1グループに3つの漢字が含まれる				
分類内容			グループ 延べ件数	字形の特徴
上	土	十	1	外A
人	入	八	1	外A
見	貝	買	1	部F+■
右	左	布/古	2	外B
間	聞	間	2	部B
者	暑	着	1	外B
固	個	困	1	部B+□
林	森	木/木/休	3	部A+外B
文	交	校/父	3	外B
百	白	父	1	外A+外B
夫	天	大	1	外A
思	忘	忙	1	外B+□
然	燃	無	1	外B+□
無	燃	然	2	外B+□
海	母	每	1	外B
内	肉	病	1	外A+外B
員	買	貝	1	外A+■
員	貝	買/貸/元/具	4	外B+■
買	具	具	1	外B
引	弱	強/号	2	外B+□
午	牛	年/千	2	外A+外B
林	休	森	1	外B+□
来	平	半	1	外B
化	花	北	3	外B+■

資料4-2 学習者の漢字分類の分析結果(2)

田	由	円	1	外B
問	関	簡	1	外B+口
門	間	聞	2	部B
門	開	閉	1	部B
困	団	固	1	部B
録	銀	金	1	外B
小	水	少	1	外B
向	可	何	1	外B+口
馬	駅	両/駿	2	外B+部B
大	犬	太	3	外A
貝	具	員	1	外B+■
短	頭	豆	2	外B+部A+口
市	姉	妹	1	部B+外B+口
困	固	国/国/団/個	4	部B+口
終	紙	約	1	部B
遠	遅	速/速/達/走	4	部B+外B
注	住	主	2	部A+口
各	客	名/反/落	3	外A+外B+■
伝	公	去	1	外B
池	地	昼/世/他	3	部A+外B
持	待	時	2	部A
同	何	回	1	外B
夕	多	外	1	外A+外B
休	休	本	1	外A+外B+口
具	具	買	1	外B
痛	通	角	1	外B
題	願	宿	1	外B
運	転	連	1	外B+部B

資料4-3 学習者の漢字分類の分析結果 (3)

誌	調	設	1	部B
子	好	女	1	外B+口+■
月	自	目	1	外A+外B
忘	忙	思	1	部B+外B
今	冷	?(不明)	1	
正	証	立	1	外B+■
力	協	加	1	外B+■
日	目	口	1	外A
売	読	元	1	外B+■
グループ数合計				92

《凡例》

- 偏が一方にはあって、もう一方にはない。
 - 冠が一方にはあって、もう一方にはない。
 - 旁が一方にはあって、もう一方にはない。
 - 構が一方(一つ)にはあって、もう一方(ほかの二つ)にはない。
- 部A 一方(一つ)の偏ともう一方(ほかの二つ)の偏が異なる。
- 部B 一方(一つ)の旁ともう一方(ほかの二つ)の旁が異なる。
- 部C 一方(一つ)の冠ともう一方(ほかの二つ)の冠が異なる。
- 部D 一方(一つ)の構ともう一方(ほかの二つ)の構が異なる。
- 部F 一方(一つ)の足ともう一方(ほかの二つ)の足が異なる。
- 部G 一方の部首が垂でもう一方の部首がにようである。
- 外A 部首以外の部分の形が微妙に異なる。一つないし二つの線や棒や点の有無による違いなど。
- 外B 部首以外の部分の形が極めて異なる。
- * 表中の「+」は、上記の項目が複数該当することを表す。